

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	宗教上より見たる眞我觀：論説
Author(s)	吉田，修夫
Citation	龍南會雜誌， 9 7： 1 4 - 2 4
Issue date	1903-02-25
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5451
Right	

れ孔子が社會調和の上にて、道德、經濟これ二つにして一つなるを看て、先づ一般に均しき富あらじめ、ろを透して仁ならしめむとしたる、豈に偉ならずとせむや。

ろをいひ盡くさむは、猶は多くの言を要すべし、されど今は、支那の昔に「ユートピヤ」などの如き、新社會をあらはさむとしたるさま、孔子が言句の間を往來して、みる目あやなる心地とするに、いさやとして、わが心の絃に撥して、此の古めかしき一曲を弾じたるまでなり。されば支那儒教の後世、其の姿をかへて、道德の標準としてのみ、其の國の政治家に採らるゝは、地下の孔子、何とか思ふらむ、彼のソクラテスがいひけむ、「われは多くのよき青年を教へて、政府に立つべき人を造りたれば、自から政府に入らずとも、已れ政府に立つに同じ」の如き感興ありや、否や。

宗教上より見る眞我觀

吉 田 修 夫

雜羊、さきに、龍南會社誌九十五號に於て、生命の宗教と帝國精神の内容とといへる、未完稿の論文を掲載せしが、雜誌部委員より其の完結を促さるゝと急なり。然れども、年來の肺患漸く重くして、新に筆を起して、堂々の論をなすに堪へず。幸に、健康回復するの日至うば、筆を取つて、或は天孫人種を論じ、或は日本民族とイスラエル民族とを比較し、或は日本建國の大精神を觀索し、帝國精神の現顯たるべき人物を批判して後、大に帝國精神の内容を論じ、大和魂と基督魂の契合一致する所を論究して、讀者の高教を仰ぐべし。茲には舊稿を呈して、僅かに、雜誌部の追責を免れんと欲すのみ。若し夫れ、幸にじて、龍南の風教に幾干の貢獻する所あらば、記者の望は足れり。右は雜誌部と讀者に對して、予が無責任の御斷り迄一言添へたるものなり。讀者之を諒せよ。

我とは何ぞや、我の真相、我の真格は如何なるものなるか。此の問題は、實に古今東西の哲學者宗教學者の腦漿を絞れる大問題なり。予輩は此問題を以て、人生觀世界觀の根本問題先決問題なりと信ず。自我の真相、自我の意義が明瞭ならずして、一切の人生問題を解釋せんとするは、到底不可能、不可到達の事なりと信ず。乞ふ、吾人をして、敢て自我の真相真格の如何なるものなるかを研究せしめよ。莊麗雅致崇高雄大なる自然美も、盲人には何の思想も、何の趣味も、何の快樂をも與ふることあらす。何となれば、盲人には自然の美を感得する能力視覺の不可能なるものあるか故なり、即ち盲者に取りては自然美が超經驗的超自然的たればなり。白鶴歌ふて、玄雲天に舞ふと感せしむる音樂も、聾者には、何の感化をも與へず、彼は之によりて、其の情感を養ひ、高尚なる趣味、健全なる思想を養ふこと能はず。之れ、即ち聾者は音の美を感じる聽覺の無能力なるかためなり、即ち聾者に取りては、其の音美が超經驗的超自然的たればなり。自我の真相真格自我の意義の何たるかを認識せざるものは、心的盲人心的聾者にして、必然彼には、天地万有は無關係なり、無意義なり。人生觀、宇宙觀如何にしてか明かならんや。

自己を知らざるものには、如何なる智識も、其の實力其の生命となるものにあらず。自覺心なきものには、宇宙の真理、宇宙の理法は、更に關係あらざるなり。彼等は之によりて、彼等の精神を發揮し、彼等のセルフを實現すること能はず、視ても見えず、聴くも聞へざる憐憫の狀態にあるなり。世界宇宙に如何なる真と美と善とが實在するも、自我の何たるを認識せざるものには、遂に空の空の空なり。如何に聖賢の言、天使の如き深奥なる説をなすとも、たとひ諸般の藝術に達したるとも、自己を知らざるものは、單に鳴銅器械のうれに類して、人格の成立は到底不可望の事に屬す。

凡そ、自己以外の事物を眞に認識せんと欲せば、先づ自己を認識せざる可からず。自己認識は智識の根本、智識の端緒なり、精神活動の動力なり。何となれば、天地自然、万有一切の客觀的現象は、皆な自己一身に集り、自己一身を圍繞するが故なり。宛ながら、一切の星宿天体が、北斗星を中心として圍繞廻轉するが如し。換言すれば、萬有の中心力は我なり。何となれば萬有の認識は、我を除いては、決して可能の事ならざればなり。デカートが、萬有の實在、神の實在を認識したるは、自我の實在を否定し能はざりし結果なりき。批評哲學の開祖カントは、宇宙の萬有は、自己の觀念なり、自己の表象なり、と曰へり。素より客觀の認識は、主觀の認識を離れ、主觀の認識は、客觀の認識を離る可からず。他知は自知、自知と他知とは、決して之を離して思索し得べきものにあらざり、成立すべきものにあらざるも、先づ自己を認識するは、萬有の眞理を知り、其の眞理と靈感し、之と親和契合する秘訣なり。天國涅槃に入るの鍵論なり。

要するに、我は我以外の實在、若くは我以外の一切の現象を寫象する鏡なり。故に其の鏡明ならば、萬有現象の實相を認識し悟了することを得るなり。基督が「心の清きものは神を見る」と曰へるも、佛教の維摩經に「心淨なれば國土亦淨し」又た佛本行經の歎如來品に「以佛眼觀見三千界如鏡」と曰へるも、此間の消息を明にしたるものなり。

現象と本体とは、兩者全く隔離したるものにあらず。現象は本体に依り、本体は現象を離れてあるものにあらず。宇宙全体を達觀すれば、一切差別の所有現象の本体は、決して其の現象の外に離れて思索することを得ず。現象即實在なり。而して有限差別の現象たる我れが、我以外の有限差別の現象即一切の萬有と、萬有の實在本体を認識せんと欲するには自我の認識に出立するを要す。「宇宙萬象の

縁起は、全く主觀的なり、と曰へる佛教の三界唯心論は、其の唯心を以て、宇宙萬象の總と觀念して、心外に一の法なしとなせるは、客觀と主觀とが同時に豫想せらるべき、不可離の關係にあるを知らず、片面の眞理を知りて、他片面の眞理を忘却したる批難を免れざるべきも、大に其間の道理を明にしたるものなりと信ず。即自我の眞相先づ鮮明されなば、萬有現象の本体は自ら瞭然たるべきなり。眞理を聽て深く靈悟し、深く銘得し依て以て自己の生命活力を得ると得ざるとは一に自己を認識するとせざるとの結果なり。精神的活動、生命即内容の發展、道義的進歩は一に自我の眞相眞格を認識するとせざるによりて大影響を蒙るものなり。

人に最も緊要なる識力は、悟識力なり之の悟識力あらば、萬有は實に我の所有なり。恰かも磁石が其觸接するものを吸引するが如く、又詩人が天地自然を自己の趣味に同化し、悉く之を詩美化するが如く、見るとし見るもの、知るとし知るもの、聞くとし聞くもの、宇宙六合一切萬有悉く我に吸収し、結合して以て、自己の生命、自己の思想、自己の活力と化するを得るなり。實に悟識力は人生生活に於て、必要なるものなく、之の識力は、實に眞理所有、眞理體現の鍵なり。然るに、此の悟識力は、自知心によりて、初めて所得せらるるものなり。自知心は實に感應力なり。感應力は實に同化力なり。凡て一切萬有自己以外を自己其者に結合し親和する力なり。之によりて、身外事物を自己に同化し、自己を身外事物に同化せしむることを得るなり。同化力は合致する力なり。異性を同性に化成する力なり。而して是は實に自我の眞相を認識せる自知者の特徴特質なり。實に自知は他知なり。他知は自知を離る可きものにあらず、他知の根原基礎は自知なり。自知の始は他知の終なり。自知のアルファと他知のオメガは一なり。

天地宇宙の大精神、万有の大生命、一切現象の本体、之を哲學的に云へば實在、之を宗教的に云へば神或は佛を悟識し、之と親和契合するの妙趣に到達し、人生至高至美至善の生活をなし、道義の大活動をなすの原活力、動機力實に自知心即ち自己を認識するに在り、即ち自己の真相——真我——を認識するに在り。之れ實に人生生活一切の統轄力にして人生觀宇宙觀の根本なり。然らば真我と何ぞや。予は、人間が萬有の靈長たる所以の意義を解せざらば、吾は何處より來り、何處に歸命すべきかを知らざらば、人生は何のために生存し、何をなすべき運命のものなるやを解せざらば、吾の正に取るべき行爲の眞義の何たるを知らず、人生として吾は如何なる生活を營むべきかを解し得ざらば、人生として如何に理想すべきかを知らざらば、一度び道に志して、孔子の實際的倫理を研究して、未だ内心的改化の生命、愛義の眞情を感得すること能ず、轉じて基督の宗教に至り、予は先づ基督敎舊約聖書を繙きぬ、予は開卷一章を終へずして、よし其か非科學的なるにもせよ、予は實に其天地創造説の他國民の創造説の如くならんを、其文章簡潔にして單明なる、其詞句の流暢にして、描寫の巧妙なる、其着想の奇抜にして進歩的なるに、少なからず、動かされつゝ遂に予に取りては、予か生命、予か精神に取りては、不朽なる最大發見をなせり。自己の眞價眞相即眞我の認識即ち是れ。

然らば則ち聖書は正に何と言へるぞ。曰く「人は神の子なり」と。ア、イスラヘル人が人類に關して、抱懷する構想の俊勁卓抜にして、其の理想の何ぞ雄大莊重崇嚴なるよ。

予は、茲に、眞我を發見し、斯くて、吾が胸中にわだかまりし懷疑、釋然として解け去り、其の刹那に予は實に衷心の奥に新なる生命の溢れ溢れ來るを覺ゆ、新なる希望、新なる光明の天上に輝けるを見たり。

自我の眞格（自己の眞價真相即眞我）を認識せざる結果として、自他が如何なる關係にあるかを知らず、自他關係の眞我を知らざる結果として、如何に人類が無用の生活、煩惱劫罪の生活を營みつつあるかを見ずや。吾が活ける宇宙に眞理あり、而かも其の心靈の生命となり、活力とならざるは何ぞや。吾が活ける宇宙に光明あり、而かも吾が心靈の鑑照とならず、指導とならざるは何ぞや。之れ即ち眞我を認識せざる必然の結果たるなり。人が暗黒の奴隸、罪劫の子たるは何ぞや。之れ即ち眞我―自我の眞格を認識せざる當然否な必然の結果たるなり。自我の眞格、眞我を認識して、初めて、活ける生命、活ける道義力を自得するなり。精神的生活の眞致を實現することを得るなり。予は自我の眞格、眞我を聖書に發見したる時、實に一大光明に接したるを覺へたり。

ヒユマニチ―とは何ぞや、（詳細は本誌八十七號より九十一號に亘りて之を論じたるが故に幸に讀者の参照を乞ふ）ヒユマニチ―とは實に星雲の無限なるも、以て比較すべきものにあらず。太陽系統の不可計算大なるも、以て比較すべきものにあらず。夜と晝と水と陸と蒼窮とを以てヒユマニチ―の崇大に比較せらるべきか、あらず。宇宙一切萬有到底ヒユマニチ―の尊大に及ぶ可らず。基督は、殿よりも大なるもの此處にありと言ひ、釋迦は天上天下唯我獨尊と言へり、東西の宗教的天才が自己の人格を意識したる其意氣や相等し。然れども、此の彼等の意識自覺は、單に彼等自身の意識自覺を言ひ顯はしたるものにあらず、實に同時に彼等以外のヒユマニチ―をも、斯く觀じたるなり。此の彼等の自覺意識たるや、實に個人個人の内に天地宇宙間の至高至美至嚴なるものゝ存在せるを意識せる自覺なり。換言すれば、人は實に之を哲學的に言へば、實在の表象顯現、是を宗教的に言へば神の子なりと云ふ意識なり。

嶙嶭たる高山、清澗なる清水、朗なる郊野、蒼々たる天空の中に、原始人の宗教心は、神を認めたり又勇者戦陣の間に馳驅するが如く、紫雲一帯に變ける東雲の間に、萬朶の光線を發して、輝々として昇り來る旭日を見ては、其の鬱勃たる陽氣に感じ、其處に神を認め、太陽崇拜の宗教を形成したり。眞に吾人は造化萬有に對し、其雄大莊嚴に觸るゝや、當に美と樂みを感ずるに止まらず、眞に靈感神興を感じ、靈格即ち神佛の實在を認識せざるを得ざるものあり。

然るに神を認識するは、我れ以外の自然造化の内に限らず。萬有の上にあり、萬有を通じて偏在せる神は、無心無靈の自然造化に認識せらるゝよりも、更に顯著なるものあらざるべからず。ろは何物ぞ、即ちちヒュマニチーなり。吾人は最も明に人間の内に、神を認識するものなり。見よ造化自然を見るも、之れ我にあらずや、造化自然の靈妙雄大なるに驚くも、之れ我れにあらずや。其の造化自然の内に實在即ち神を認識するも、之れ又我にあらずや。然らば造化萬有實在を觀するもの之れ我にあらずや。我は即ち其の中心なり。中心の我れ先づ存じて、宇宙萬有始めて存ず、果して然らば、或る意味に於て、我は造化萬有を超越せる存在なりといふも不可なかるべし。即ち宇宙の内に生活して、宇宙と共に進行する宇宙よりも大なり。基督が、殿よりも大なるもの此處にあり、と言ひ、釋迦が天上天下唯我獨尊と言ひしは、正に這般の消息を表明したるものなり。斯る尊大なるヒュマニチーに於て、神を認識せざるの理あらんや。イスラエル人は、人は神の子なりと言ひて、人中在神と觀じたりき。余は先に神は宇宙の上に超越し、又宇宙の中に遍在すと言ひ、人は宇宙の中に生息して、宇宙よりも大なりと言へり。果して然らば、所縁の神と所求のヒュマニチーとは、之を宗教的に考察して、父子有親の關係にありと言ひ、之を哲學的に思索して、實在と現象、本体と

現象の關係にありと云ふ斷定は、正當の判斷たるべし。故に吾人はヒュマニチーに於て最も明に神を認識する事を得べし。さればこそ、基督は我れを見し者は神を見し者なりと言ひたれ。基督敎發達の沿革中基督を神と觀するに於て、佛敎發達の沿革中釋迦を佛と觀するに於て、宏大なる哲學思想と深遠なる宗教觀念の結合、前者に於ては、三位一體論を、後者に於ては、佛身論を形成したるも、實は如述の思想より演繹せられたるものなり。此の論は、實に抽象的に認識したる一如の神を、基督に於て、其の表象具體の神と觀し、抽象的に認識したる眞如佛を、釋迦に於て其の表象具體の佛と觀じたるものなり。實に客觀的に見たる神は、主觀に於て我ならざる可からず、眞我ならざる可からず。神と我とは實に一なり。

神性を以て、佛性を以て、顯現したる人類こそ、實に宇宙の眞と美と善とを合して、精を盡し、粹を盡し、美を極めたるものにして、眞に萬有の上に、造化自然の上に位する神的存在者なり。

人は神の子なりと、是れ實にヒュマニチーのヒュマニチーたる眞相なり。之れ即ち我の我即ち眞我なり。人類が萬有の靈長たる所以の意義實に此に存す。人、ヒュマニチーとは何んぞや、我の眞相とは何んぞや、この疑問に答ふるものにして、斯の如く高尚に、斯の如く明晰に、斯の如く雄大なる、卓犖なる、秀拔なる、奇勁なる、豪壯なる、宏遠なる、幽玄なる、深奥なる、偉大なる、健全なる思想夫れ何處にかあらんや。

神の子とは、其の形而下の物質即其形体が神と同じと云ふ意にあらず、ヒュマニチーの中に、嚴然として實在せる其の主宰力なる、能力なる、生命なる内心の奥に輝ける人格を云ふ。佛敎の涅槃の本体は、靈的眞心なり。靈的眞心とは本覺眞心なり。余は又之を人格と云ふ。如上の人格は、實に

佛的なり、神的なり。故に人此の人格の命に従ひ、よし人は善なりと云ふも、我が靈惡なりと云はんには、我れ之を行はず、人は惡なりと云ふも、我靈善なりと云はんには、我れ之を行ふ。此に於てか、人は本我を維持して、眞にヒュマニチーのヒュマニチーたる眞致を實現するを得ん。人類社會は。此に愛義和樂の滿つる基督教の所謂神國、佛教の所謂涅槃境と化するに至るや明かにして、是れ實に基督の理想佛陀の本願たりしなり。

余が宗教的意識を以て、宗教の見地よりしたる眞我觀は、基督教の言葉を借れば、人は神の子なり、佛教の言葉を借れば、人は佛性なりと云ふにあり。換言すれば、神子觀佛性觀、是れ自我の眞格、即ち眞我なり。現今倫理學上最も有力なる説として、其の哺育の中にある、自我實現説の自我とは如何なる意義のものなるや、我れを知らず、思ふに斯説の自我觀念や理想は完全圓滿なる、と云ふ空漠たる觀念に外ならざるべきか。果して然らば有限なる人性は、不可計算を豫想せざるを得ざる此理想に到達し得べき可能ありや否や、余輩は倫理學の方面よりは、殆んど之を辨明すること能はざるべしと信ず。倫理學上の自我實現説は、一度之を聞て如何にも深遠なる意味を含めるが如しと雖も、其自我の觀念たるや、主觀的のものなるや、客觀的のものなるや、將た主觀と客觀とを通じて寫象せられたるものなるや、當今の倫理學者は是に向て何等の解釋を與へざるものゝ如し。余輩は此の自我實現説に矛盾又は困難の点あるを發見すれども、今茲には是れが説をなさざるべし。余が前述せる自我の眞格即ち自我は實現されたる倫理學上の自我と一致する所あるや否やは、一に、讀者の思索に任せ、余は茲に明解せざるべし。若し其れ幸に高教を與へらるゝものあらば、其時に余が意見を發表することあるべし。只茲には余の宗教的意識が宗教的觀察に於て見出したる眞我は、實に

神的なり、佛的なり、と云ふにありと、讀者の了解を乞はざればなり。

此の眞我觀が人生々活の上に及ばず感化を簡單に述べて、此論を終らんと欲す。此の眞我觀は、人生生活に於て如何なる主義なるかを見るに、實に此眞我觀は、進歩主義なり、平等主義なり、社會主義なり、博愛主義なり、發展主義なり、生々主義なり。故に積極的に人生生活を指導し、道德的理想、宗教的理想に向て、向上精進憧憬せしむるものなり。又此觀念は實に人と神とを調和し、又人と人とを調和せしむるものなり。人と神とを調和するものは宗教なり、人と人とを調和するものは倫理なり。果して然らば、此眞我觀は倫理と宗教とを調和するものなり。更に大膽に云へば、宗教の立脚点は、此の眞我觀に於て、始めて、完全に成立し、此眞我觀を理想として、始めて自我實現説の倫理は完全に成立するを得べし。倫理と宗教との衝突を迷想し、又倫理と宗教との關係を解せざるものは、余が今述べたるところを深く考察さるゝことあらば、大に了解する處あるべし。此眞我觀の自覺ありて、初めて人格を成立し得るものなり。何となれば、此自覺は各個人の感情と認識と意識とを統一調和するものなればなり。認識感情意志の完全に調和せられたるもの、是れ實に人格なり。此自覺と人格とは不可差別の關係にあり。人格の成立は此自覺に伴ひ、此自覺は人格を伴ふ。人格と自覺とは一乘如々にして、離して思索すべきものにあらず。此人格とは實に眞我の實現したるものなり、實現の眞我なり。嗚呼此自覺は、實に人をして生なく、死なく、平等無差別、神智靈覺の妙境に、至らしむるもの、嗚呼吾人は此眞我觀を以て、人生生活の主義及び理想とせんかな。

一度此眞我觀に立てば、社會主義、國家主義、個人主義、自由主義、厭世主義、樂天主義、快樂主

義、自我發展主義、自我絶滅主義、其他一切の主義は其價值を判斷することを得べし。更に一切の人生觀社會觀は、釋然として解決せらるべし。而して斯の如き眞我觀は宗教の見地に立たざれば決して明瞭に意識すること能はざるが故に余は大に讀者諸君の宗教研究を促すものなり (完)

俚歌を論ず

丸 山 篤

"Sometimes, too, there was the idle song of the muleteer, sunneter along the solitary road; or the notes of the guitar from some group of peasants dancing in the shade" — Irving.

歌(即ち廣義に解せる詩(Gedicht))とは何ぞや。我が信ずる所に依れば、是れ即ち最も眞摯なる宇宙の聲なり。宇宙を貫く一大生命の發言なり。詳言すれば是の大宇宙の間に磅礴し、瀾滿する、所謂眞善美の發聲なり。既に宇宙の聲なり、自然の發音なり。故に歌は只だ人生にのみ限りて存在するものに非ず。眞摯なる音響の發する處、傳はるところ、自然界の那邊にか、曾て歌莫からん。林間に歌ふものは鳥にあらずや、池畔に歌ふものは鳴蛙ににあらずや。夏來れば蟬樹上に歌ひ、秋來れば蟲籬邊に歌ふ。彼の淙々たるものは流水の歌に非ずや。是の鬱々たるものは波濤の歌に非ずや。吾人試みに身耳と心耳とを澄まして立つ、其何れの時、何れの處たるを問はず、曾て或る種の歌を聽かざること莫し。就中歌の最も變化し、錯綜し、出沒し、紛糾し、所謂變幻出沒、千變萬化の靈